

巻頭言

過去の自分より優れていたたい!!  
**More better than the past of myself!!**

私が表面分析に携わり始めたころ、表面分析の標準化を行っている人たちがいるという噂を聞き、VAMAS-SCA Japan (バマス) という当時の DOS/V (ドスヴィ) \*にも似た怪しい響きに魅せられ、1992年に中目黒の金属材料技術研究所(現 物質・材料研究機構)で開催された公開シンポジウムに参加したのが今の表面分析研究会とのなれ初めです。その後、研究会に足しげく通う中で、国内外の超一流の(表面分析発展期の礎を築かれた)諸先生と直接お話をする機会に恵まれ多くを学び、異分野の産業界に属する多くの人脈を得ることができました。

VAMAS や表面分析研究会の標準化活動に接し、標準化のためには、その装置は最低限の調整がされていなければならない、必然的に参加者に対してハードウェアに関する教育がなされ非常に勉強になりました。例えば、標準化活動の中で、AES のエネルギー分解能 ( $\Delta E/E = \text{const.}$ ) チェックを行うように指示が出た際に参加者の AES 装置の検出器が次々に壊れ、装置メーカーが「何事か？」と驚くという事態になりました。これこそ、まさにハードウェアに対してユーザが無知だったため必然的に起きた事例です。今日では、ハード・ソフトともにも格段に進化し完成された装置が供給され、昼夜を問わない自動測定が可能で、“装置の専属でない人” “測定の本質を知らない人”でも容易にそれなりの結果が出せるようになりましたが、装置がブラックボックス化されているのではないのでしょうか。ぜひ自分の装置の特性を含む、ハードウェアに関して勉強し、実際に自分の装置が教科書どおりに動作しているか確かめてみてはどうでしょうか？ また、自分の使っている測定技術の背景や周辺技術が完成するまでの要素技術をふり返ってみませんか？ このような試みにより、きっと新しい知見が得られ、表面分析に関する知識に広がりを持たせることができます。そして得られた知見をぜひ研究会の場で披露し、議論してみてもどうでしょう。表面分析研究会は、設立当初から実際に表面分析装置を動かしている皆さんのものであると確信しています。

最近の私は、表面分析装置の前に立つことから遠ざかっていますが、振り向いた昨日に恥じないように、仰ぎ見る明日に恥じないように「過去の自分より少しでも優れていたたい!!」と思うようにしています。表面分析研究会に参加し、実際に表面分析装置を動かしている皆さんの成長こそが、研究会が進化する原動力であると信じています。

中村 誠 (富士通研究所)

\*1990年に日本アイ・ビー・エムが発表した PC/AT 互換のパーソナルコンピュータ用のオペレーティングシステムの通称。